令和二年度入学者選抜試験問題

人文社会科学部人文社会科学科（人間文化コース）
医学部医学科
前期日程

国語

注意事項

1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2 この問題冊子の本文は、1ページから16ページまでです。

3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明・落丁・乱丁、解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

4 監督者の指示にしたがって、解答用紙に**大学受験番号**を正しく記入してください。**大学受験番号**が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。

5 **人文社会科学部受験者**は、「一」、「二」、「三」を解答してください。
医学部受験者は、「一」、「二」を解答してください。

6 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

一　次の文章を読んで後の問い（問1～6）に答えなさい。

人間は他のいろいろの生物、殊に高等ホニュウ動物と比べても際立った特徴を持っている。他の諸動物は例えば形態学上それぞれの生活環境に適した特殊化された身体器官を備えているが、人間は身体的に特定の生活環境にだけに適うこれといった特殊化された器官を持っていない。他の諸動物の場合、たしかに多少は生誕以降新たに形質を獲得することもないわけではないが、種固有の本性と生存様式は大部分が遺伝的にすでに決定され、したがって、それらは種固有の環境を割当てられている。だから何らかの理由で生活環境が急変したり、そこからクチクされたりすると、この種はもはや生命の維持すらおぼつかない。これとは違って人間の場合には、この意味では種固有の生活様式や生活環境といったものはない。単に動物という水準で見れば、人間もまた動物的身体の機能と制約とから逃げることはできないが、しかしこの枠の範囲にとどまる限り、ほとんど無限ともいえる多様な生活様式と環境をもつこともできるかに見える。

諸動物が能力や生活様式の面で一種の閉鎖システムの形をとっているのに対して、人間の方は社会＝文化的な学習を通じて、自分の何たるかだけでなく、自分の定住地まで改めて獲得する程の、相対的に解放されたシステムをとる。人間が他の諸動物に比べてほとんど例のない未成熟状態で誕生し、二〇年にも及ぶ異例に長い成長期をもつのは、それが先天的に決定を受ける度合いが少なく、環境に応じて多様な方向と範囲で発達できる自由な成型性を備えていることを暗示している。広範囲にわたって成型のきくこのような素質の解放性が閉じられるのは、実は、社会＝文化的な道具立てを介しているからである。今日なお未解明な側面を残しはするものの、人間は相対的に解放されているという意味で自由な生物であり、いろいろの変容が可能な社会＝文化的成型体なのである。

K・マルクス（注1）はかつて、人間の本質が社会関係の総体であると述べたことがある。これはおそらく客体的所与である社会＝文化的道具立てに準じて本質変化を遂げる人間のこの特徴を指摘しようとしたものであろう。人間は先天的に決定されるところが少なく、社会＝文化的道具立てを通じて相対的安定を達成する。諸生物が遺伝子によって形態学的決定を受けるように、人間の場合には社会＝文化的道具立てが決定因子として作用する。これらによって諸個人の生存様式の定型化が実現するだけではなく、世代間の連続性も維持されるのである。

ところで、この決定因子をめぐってまた別の意味で自由な生物としての人間の特徴が出現する。いま述べたように、人間は客体的所与としての社会＝文化的道具立てによって［c］的に決定されるわけだが、しかしこれらに対して単に一方的に［d］的に振舞うかといえば、そうではなく、むしろこれらを超え出て積極的な創造行為に出ることもできる。それどころか、極端ないい方をすれば、これらの一切が人間の［e］性ないし歴史的創造行為の成果や産物なのである。近代の楽観論的世界観がもたらした人間の能動性や自由といった考え方のうちには、たしかに過度の希望的観測やコチョウ

が含まれているが、しかし人類が比類なく能動的で自由な生物であることは事実と思われる。人類の歴史はいずれの意味でも、生活環境もしくは社会＝文化的道具立ての多少とも能動的改変の歩みの歴史だった、といっても過言ではあるまい。

まず人間は、風土上の不都合や限界に直面したとき、いうまでもなくそのつどの技術的知識水準が許容する範囲においてではあるが、それらに対して目的々に臨み、自覚的に操縦を行いながら、自らの生活に少しでも適ったいわば人為的な自然環境を創り出してきた。マートン(注2)の用語を借りれば、他の動物のように自然過程を自覚しないIV ままこれに単に本能的かつ盲目的に臨むようなことはしないV で、むしろこれらを種々の程度に自覚的反省の対象にし、一定の目的々な見地から方法的に制御・利用しようとした。人類はむき出しの直接的自然に縛りつけられることはなく、それを超え出て一定のいわば自由な目的の王国に住まうことができた。

すでに述べたように、人間は身体的に分化した特殊器官を発達させることのない、環境条件に対してはきわめて無力な生物である。ところが、そうであればこそ反対にA この欠点を利点に変えてきた。人間が道具を作る動物、つまりhomo faberだとはむかしからいわれてきた言葉である。人類は当初は身体器官をダイタイエし補強する技術を、そして遂には効果的な負担軽減になる技術を開発した。人類はこのようにして直接的な身体の制限から解放されただけではなく、自らは労力を節減し、なおかつ行動半径を途方もなく強力に拡張した。それは自らに固有の身体的制限を脱出する自由を持ったのである。

最後に社会に関しても事情は同様であると言える。ヘーゲル(注3)が世界史の歩みを「自由の意識における進歩」と定義したことはよく知られているが、歴史は、事実、社会のより多くの個人に対して自律的活動の余地を漸次に拡大する方向に進んできた。一方ではいわゆる生産性を高め、ゆとりのある物質的条件を作り出し、他方では種々の社会的制約を除去することによって、より多くの個人が自己サイリョウオにもとづいて手段をコントロールしつつ自主的に行動できる機会と生活空間とに与(あずか)れるような方向に進んだのである。個人を含む全体たる社会はその安全性を脅かす内的・外的な攪乱(かくらん)要因に不断に晒(さら)されている。それゆえ、社会が安定した方向に進み得るためには、そうした攪乱要因を有効に制御できる調整装置が制度的に作り出されていなければならない。ところで、この調整装置はといえば、これら攪乱要因を生みやすい複雑な内外的社会過程に、単にそのつど本能的反応を示すだけでなく、むしろ自覚的に対処して有効な制御を行おうと努力するときにのみ作り出される。残念ながら今日でさえ、このことはきわめて不十分な水準にとどまっているが、しかし人間がやはり長短さまざまの目的々な見通しを持ち、社会過程の自覚的操縦による制御に努めてきたことは事実である。歴史の歩みはいろいろの見方で見ることができるが、しかし社会が問題に直面する度に、当初は無自覚的・本能的に、ついで漸次に自覚的に社会過程を操縦して自己制御力を強化させる過程であったと見ることもできる。

このような生物としての人間は一面では自らの環境に準じて自己の可能性を開花させる社会＝文化的成型体である。と同時に人間は自らの環境、すなわち自然環境、身体的制限および社会文化的環境の直接的所与に縛られて単に受動的に振舞うのみではなく、むしろこれらを拒否し、超越的な目的々観点に立って創造的にも振舞う。ここで環境のことを一括して客体と表現すれば、他の諸動物がいわば一方的な客体順応型の生活を営むのに対して、人間は客体順応的側面を持ちながらも、なお積極的な客体操縦型[B]の生活をも営むのである。客体にかなりの程度に左右され、その制約下に置かれている以上、たしかに客体順応的ではあるが、しかし、それらを自覚的に操縦・制御してきたかぎりで客体操縦的なのである。人間はこうした意味で自由な生物と言えるだろう。

（三浦和男「現代のディレンマ」による。原文の表記を一部変更し、また一部を省略した。）

注1　カール・マルクス……ドイツの哲学者、経済学者。（一八一八～一八八三）

注2　ロバート・キング・マートン……アメリカの社会学者。（一九一〇～二〇〇三）

注3　ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル……ドイツの哲学者。（一七七〇～一八三一）

問1　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直し、楷書で書きなさい。

問2　傍線部Ⅰ～Ⅴのうち、文における働きが他と異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

Ⅰ　特殊化された器官を持っていない

Ⅱ　もはや生命の維持すらおぼつかない

Ⅲ　逃げることはできない

Ⅳ　自然過程を自覚しないまま

Ⅴ　臨むようなことはしないで

問3　傍線部aとbの本文中の意味として、最も適切なものをそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。

a　閉鎖システム

① まったく環境にかかわらないシステム
② 一定の能力以上に変化をしないシステム
③ 無限ともいえる多様な可能性を持つシステム
④ 環境に適う特殊化した器官を持つシステム
⑤ 能力や生活様式についての可変的システム

b　解放されたシステム

① 未成熟状態で誕生するシステム
② 社会＝文化的に解放的なシステム
③ 環境に応じた自由な成型性のシステム
④ 遺伝子による形態学的決定システム
⑤ 世代間の連続性を保証するシステム

問4　空欄c～eに補うための正しい表現の組み合わせを一つ選び記号で答えなさい。

① c 相対　d 受動　e 能動
② c 相対　d 能動　e 受動
③ c 受動　d 能動　e 相対
④ c 受動　d 相対　e 能動
⑤ c 能動　d 相対　e 受動
⑥ c 能動　d 受動　e 相対

問5　傍線部A「この欠点を利点に変えてきた」とあるが、「利点に変えてきた」とはどのようなことか。「道具」「補強」「身体的制限」の語を必ず一度ずつ用いて、六〇字以上、七〇字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問6　傍線部Bで筆者がいう「客体操縦型」という概念における「客体」とはなにか。本文から二〇字で抜き出しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

二 次の文章は、主人公・三四郎が高等学校を卒業して東京帝国大学に入学するために上京する部分である。文章を読んで後の問い（問1～6）に答えなさい。

うとうととして目がさめると女はいつのまにか、隣のじいさんと話を始めている。このじいさんはたしかに前の前の駅から乗ったいなか者である。発車まぎわに頓狂[a]な声を出して駆け込んで来て、いきなり肌をぬいだと思ったら背中にお灸のあとがいっぱいあったので、三四郎の記憶に残っている。じいさんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の目についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、だんだん京大阪へ近づいて来るうちに、女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠のくような哀れを感じていた。それでこの女が車室にはいって来た時は、なんとなく異性の味方を得た心持ちがした。この女の色はじっさい九州色であった。

(注1) 三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つまぎわまでは、お光さんは、うるさい女であった。そばを離れるのが大いにありがたかった。けれども、こうしてみると、お光さんのようなのもけっして悪くはない。

（中略）

しばらくすると「名古屋はもうじきでしょうか」と言う女の声がした。見るといつのまにか向き直って、[b]及び腰になって、顔を三四郎のそばまでもって来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言ったが、はじめて東京へ行くんだからいっこう要領を得ない。

「この分では遅れますでしょうか」

「遅れるでしょう」

「あんたも名古屋へお降りで……」

「はあ、降ります」

この汽車は名古屋どまりであった。会話はすこぶる平凡であった。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになってしまう。

次の駅で汽車がとまった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももっともだと思った。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、断然断る勇気も出なかったので、まあいいかげんな生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎はてごろなズックの鞄と傘だけ持って改札場を出た。頭には高等学校の夏帽(注2)をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。けれどもついて来るのだからしかたがない。女のほうでは、この帽子をむろん、ただのきたない帽子だと思っている。

九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわっている。けれども暑い時分だから町はまだ宵の口のようにぎやかだ。宿屋も目の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちとりっぱすぎるように思われた。そこで電気燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶらぶら歩いて行った。むろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗い方へ行った。女はなんともいわずについて来る。すると比較的寂しい横町の角から二軒目に御宿という看板が見えた。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であった。三四郎はちょっと振り返って、一口女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきってずっとはいった。A上がり口で二人連れではないと断るはずのところを、いらっしゃい、——どうぞお上がり——御案内——梅の四番などとのべつにしゃべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持って来るあいだ二人はぼんやり向かい合ってすわっていた。下女が茶を持って来て、お風呂をと言った時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断るだけの勇気が出なかった。そこで手ぬぐいをぶら下げて、お先へと挨拶をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあった。薄暗くって、だいぶ不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつはやっかいだとじゃぶじゃぶやっていると、廊下に足音がする。だれか便所へはいった様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえ、たくさんです」と断った。しかし女は出ていかない。かえってはいって来た。そうして帯を解きだした。三四郎といっしょに湯を使う気とみえる。べつに恥かしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこにからだをふいて座敷へ帰って、座蒲団の上にすわって、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡真崎村小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女のところへいってまったく困ってしまった。湯から出るまで待っていればよかったと思ったが、しかたがない。下女がちゃんと控えている。やむをえず同県同郡同村同姓花二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに団扇を使っていた。

やがて女は帰って来た。「どうも、失礼いたしました」と言っている。三四郎は「いいや」と答えた。

三四郎は鞄の中から帳面を取り出して日記をつけだした。書く事も何もない。女がいなければ書く事がたくさんあるように思われた。すると女は「ちょいと出てまいります」と言って部屋を出ていった。三四郎はB(ますます日記が書けなくなった)。どこへ行ったんだろうと考え出した。

そこへ下女が床をのべに来る。広い蒲団を一枚しか持って来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言うと、部屋が狭いとか、蚊帳が狭いとか言ってC(らちがあかない)。めんどうがるようにもみえる。しまいにはただいま番頭がちょっと出ましたから、帰ったら聞いて持ってまいりましょうと言って、頑固に一枚の蒲団を蚊帳いっぱいに敷いて出て行った。

それから、しばらくすると女が帰って来た。どうもおそくなりましてと言う。蚊帳の影で何かしているうちに、がらんがらんという音がした。子供にみやげのガングA(が鳴ったに違いない)。女はやがて風呂敷包みをもとのとおりに結んだとみえる。蚊帳の向こうで「お先へ」と言う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えたままで、敷居に尻を乗せて、団扇を使っていた。C(いっそこのままで夜を明かしてしまおうかとも思った)。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとてもしのぎきれない。三四郎はついと立って、鞄の中から、キャラコのシャツとズボン下を出して、それを素肌へ着けて、その上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持ったまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向こうのすみでまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は癇症でひとの蒲団に寝るのがいやだから……少し蚤よけの工夫をやるから御免なさい」

三四郎はこんなことを言って、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寝ている方へ向けてぐるぐる巻きだした。そうして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女とは一言も口をきかなかった。女も壁を向いたままじっとして動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳に向かった時、女はにこりと笑って、「ゆうべは蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありがとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、(注3)お猪口の葡萄豆をしきりに突っつきだした。

勘定をして宿を出て、停車場へ着いた時、女ははじめて関西線で四日市の方へ行くのだということを三四郎に話した。三四郎の汽車はまもなく来た。時間のつごうで女は少し待ち合わせることとなった。改札場のきわまで送って来た女は、

「いろいろごやっかいになりまして、……ではごきげんよう」と丁寧におジギB(をした)。三四郎は鞄と傘を片手に持ったまま、あいた手で例の古帽子を取って、ただ一言、

「さよなら」と言った。女はその顔をじっとながめていた、が、やがておちついた調子で、

「あなたはよっぽど度胸のないかたですね」と言って、にやりと笑った。三四郎はプラットフォームの上へはじき出されたような心持ちがした。車の中へはいったら両方の耳がいっそうほてりだした。しばらくはじっと小さくなっていた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果(はて)から果まで響き渡った。列車は動きだす。三四郎はそっと窓から首を出した。女はとくの昔にどこかへ行ってしまった。大きな時計ばかりが目についた。三四郎はまたそっと自分の席に帰った。乗合いはだいぶいる。けれども三四郎の挙動に注意するような者は一人もない。ただ筋向こうにすわった男が、自分の席に帰る三四郎をちょっと見た。

三四郎はこの男に見られた時、なんとなくきまりが悪かった。本でも読んで気をまぎらかそうと思って、鞄をあけてみると、昨夜の西洋手拭が、上のところにぎっしり詰まっている。そいつをそばへかき寄せて、底のほうから、手にさわったやつをなんでもかまわず引き出すと、読んでもわからないベーコンの論文集が出た。ベーコンには気の毒なくらい薄っぺらなソマツな仮綴(かりとじ)である。元来汽車の中で読む了見もないものを、大きな行李に入れそくなったから、片づけるついでに提鞄(さげかばん)の底へ、ほかの二、三冊といっしょにほうり込んでおいたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三ページを開いた。他の本でも読めそうにはない。ましてベーコンなどはむろん読む気にならない。けれども三四郎はうやうやしく二十三ページを開いて、万遍(まんべん)なくページ全体を見回していた。三四郎は二十三ページの前で一応昨夜のおさらいをする気である。

元来あの女はなんだろう。あんな女が世の中にいるものだろうか。女というものは、ああおちついて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それともムジャキなのだろうか。要するにいけるところまでいってみなかったから、見当がつかない。思いきってもう少しいってみるとよかった。けれども恐ろしい。別れぎわにあなたは度胸のないかただと言われた時には、びっくりした。二十三年の弱点が一度にロケンしたような心持ちであった。親でもああうまく言いあてるものではない。——

三四郎はここまで来て、さらにしょげてしまった。どこの馬の骨だかわからない者に、頭の上がらないくらいどやされたような気がした。ベーコンの二十三ページに対しても、はなはだ申し訳がないくらいに感じた。

(夏目漱石『三四郎』による。原文の表記を一部変更し、また一部を省略した。)

注1　三輪田のお光さん……主人公の幼なじみ。

注2　高等学校……旧制度では高等教育機関で、帝国大学への予備教育(現代の大学の教養課程に相当)を行っていた。

注3　お猪口の葡萄豆……猪口は小さな器で、葡萄豆は黒豆などをふっくらと煮た料理。

注4　フランシス・ベーコン……イギリスの哲学者。(一五六一～一六二六)

問1　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直し、楷書で書きなさい。

問2　傍線部a～cの語句の本文中の意味として、もっとも適切なものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a　頓狂な声

① 出しぬけに調子はずれな声。
② つまずいたような奇妙な声。
③ 困ったような高い大声。
④ 大きな威嚇するような声。

b　及び腰

① 腰掛けたままで、後ろに身を引くようにした様子。
② 腰を上げて、いきなり身を乗り出したような様子。
③ 腰を引いて、手を前に出すような前のめりの様子。
④ やや腰を浮かせて、身体を少しひねっている様子。

c　らちがあかない

① いろいろな解決策があり迷うこと。
② 言い分を聞こうとしないこと。
③ 妙案がすぐには出てこないこと。
④ なかなか決まりがつかないこと。

問3　傍線部A「上がり口で二人連れではないと断るはず」とあるが、なぜ言い出せなかったのか、その理由としてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　初めてのことが多くて、どの段階で説明するのがいいのか、よくわからなかったから。
イ　こういう場面に不慣れなために、どのように説明すればいいか、悩んでいたから。
ウ　肉親ではない女性と二人連れという状況を誤解されずにうまく説明するのが難しかったから。
エ　旅館の人があまりに立て続けに話し出したので説明するタイミングを失ってしまったから。
オ　見知らぬ女性と一緒に来ていることをわかるように説明するのがとても躊躇されたから。

問4　傍線部B「ますます日記が書けなくなった」とあるが、どうして「ますます」書けなくなったのだろうか、その理由としてもっとも適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　見知らぬ女性と同宿することになって自分がとても気にしているのに、女性が自然に振る舞っていることに不信感を覚えたから。
イ　見知らぬ女性と同宿することに対して、宿の人たちがこの二人の関係をどのように思っているのか、疑いはじめたから。
ウ　見知らぬ女性と同宿するのに、女性が気にするふうもなく行動していられることが不思議で気になってしかたないから。
エ　見知らぬ女性と同宿すれば、いろいろ気を遣うはずなのに自分にかまわず勝手に行動していることに怒りを覚えたから。
オ　見知らぬ女性と同宿することになってしまったのに、女性が意外な行動をとり続けることに対して好意を抱いたから。

問5　傍線部C「いっそこのままで夜を明かしてしまおうかとも思った」とあるが、なぜそのように思ったのか、四〇字以上、六〇字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問6　傍線部D「ベーコンの二十三ページに対しても、はなはだ申し訳がないくらいに感じた」とあるが、なぜ「ベーコンの二十三ページ」に対してこのように感じたのか、その理由を六〇字以上、八〇字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

三　次の文章を読んで後の問い（問1～3）に答えなさい。（人文社会科学部受験者のみ解答すること。）

今まで孔子の教えを信ずる学者が、彼の教えを誤解していたなかでももっとも甚だしいものは、「富と地位」と「経済活動」の二つの考え方であろう。彼らが『論語』を解釈したところによると、「道徳と思いやりの政治を掲げて、世の中を治める」ことと、「経済活動によって富と地位を得る」こととは、火のついた炭と氷のように、一緒にはしておけないものとされている。

では孔子は本当に、

「富と地位を手にした者は、道徳によって世の中に貢献する考えなどない。だから、高い道徳を持った人物になりたければ、金儲けなどしようと思ってはならない」

といった内容を説いていたのだろうか。わたしが二十篇ある『論語』をくまなく探してみても、そんな意味の言葉は一つも発見できなかった。いや、むしろ孔子は経済活動の道について語っているくらいだ。しかしその説き方が、孔子が他でもよくやっているように、半面的なものであったため、学者たちはその全体像を理解することができず、ついには間違った解釈を世の中に伝えるようになってしまったのである。

例をあげると、『論語』のなかにこんな一節がある。

「人間であるからには、だれでも富や地位のある生活を手に入れたいと思う。だが、まっとうな生き方をして手に入れたものでないなら、しがみつくべきではない。逆に貧賤な生活は、誰しも嫌うところだ。だが、まっとうな生き方をして落ち込んだものでないなら、無理に這い上がろうとしてはならない」

この言葉は、いかにも富や地位を軽視したような内容に思われるが、実は一方の側面だけから説かれたものだ。よくよく考えてみれば、富や地位を軽蔑したようなところは一つもない。あくまで富や地位にのめり込むことを戒められただけなのだ。この一節から、

「孔子は富と地位を嫌っていた」

などと解釈するのは、ひどい間違いだといわなければならない。孔子がいいたかったことは、

「道理をともなった富や地位でないのなら、まだ貧賤でいる方がましだ。しかし、もし正しい道理を踏んで富や地位を手にしたのなら、何の問題もない」

という意味なのだ。こう考えると、富や地位を軽蔑し、貧賤を持ち上げたところなどますますなくなってくる。この一節を正しく解釈したいなら、「まっとうな生き方をして手に入れたものでないなら」という箇所に注意するのが何より肝心なのだ。

さらにもう一つ例をあげるなら、同じく『論語』にこんな一節がある。

「富が追求に値するほどの値打ちを持っているものなら、どんな賤しい仕事についても、それを追求しよう。だが、それほどの値打ちを持たないなら、わたしは自分の好きな道を進みたい」

これも一般的には、富や地位を軽蔑した言葉のように解釈されている。しかしいま、まともにこれを読み取るなら、この言葉のなかに富や地位を軽蔑したような内容は一つも見当たらない。

「富が求める値打ちを持っているなら、どんな賤しい仕事にもつく」

というのは、正しい道や道徳によって富が得られるなら、という意味である。

つまり「正しい道を踏んで」という一句が、この言葉の裏面にあることを注意しなければならない。そして後半部分は、

「正当な方法で富が得られないのであれば、いつまでも富に恋々としていることはない。気に入らないことをして富を手にするより、むしろ貧賤に甘んじてまっとうな生き方をした方がよい」

との意味なのだ。まっとうな生き方に合わない富は見切った方がよいが、好んで貧賤にいた方がよいなどとはいってないのだ。

わたしは昔から、貧しい人々を救うことは、人道と経済、この両面から処理しなければならないと思っていた。しかし今日、これにくわえて政治という側面からも、行動を起こす必要が出てきたのではないだろうか。

わたしの友人が、昨年、貧しい人々を救うヨーロッパでの活動を視察しようと出発した。およそ一年半の日時を費やして帰ってきたのだが、わたしも彼の出発をいくらか手助けした縁があって、帰国後に同志を集めて、報告会を企画して出席してもらった。

その人の話すところによると、イギリスはこの事業を完成させるために、約三百年もの苦労を重ねたうえ、最近ようやく活動が整備されるようになったという。また、デンマークはイギリス以上に整備が進んでいる一方で、フランス、ドイツ、アメリカなどは、もう後がない切羽詰まった状況のなかで、各国独自でこの問題に力を注いでいるという。海外の事情を聞けば聞くほど、昔からわれわれとまったく同じところに力を注いでいるように思われた。

この報告会のとき、わたしも集まった友人たちに対して、こんな意見を述べた。

「人道や経済の面から、弱者を救うのは当然のことだが、さらに政治の面からも、その保護を忘れてはならないはずである。ただしそれは、人にタダ飯を食わせて遊ばせていればよい、というものではない。貧しくなってから直接保護していくよりも、むしろ貧しさを防ぐ方策を講じるべきではないだ

ろうか。一般庶民の財布に直接かかわってくる税金を軽くすることも、その一つの方法かもしれない。塩を政府が専売して、利益を上げるようなことを止めることなど、典型的な例ではないだろうか」

この集まりは、「中央慈善協会」(注1)で開催したものだったが、会員のみなさんもわたしの述べたことに納得してくれた。今でも、その実行方法について、各方面に働きかけつつ一緒に調査を実施している次第だ。

いかに自分が苦労して築いた富だ、といったところで、その富が自分一人のものだと思うのは、大きな間違いなのだ。要するに、人はただ一人では何もできない存在だ。国家社会の助けがあって、初めて自分でも利益が上げられ、安全に生きていくことができる。もし国家社会がなかったなら、誰も満足にこの世の中で生きていくことなど不可能だろう。これを思えば、富を手にすればするほど、社会から助けてもらっていることになる。

だからこそ、この恩恵にお返しをするという意味で、貧しい人を救うための事業に乗り出すのは、むしろ当然の義務であろう。できる限り社会のために手助けしていかなければならないのだ。

「高い道徳を持った人間は、自分が立ちたいと思ったら、まず他人を立たせてやり、自分が手に入れたいと思ったら、まず人に得させてやる」

という『論語』の言葉のように、自分を愛する気持ちが強いなら、その分、社会もまた同じくらい愛していかなければならない。世の富豪は、まずこのような観点に注目すべきなのだ。

わたしは普段の経験から、

A「論語とソロバンは一致すべきものである」

という自説を唱えている。孔子は、道徳の必要性を切実に教え示されているが、その一方で経済についてもかなりの注意を向けていると思う。これは『論語』にも散見されるが、とくに『大学』(注2)という古典のなかで「財産を作るための正しい道」が述べられている。

もちろん今の社会で政治をとり行おうとするなら、その実務のための必要経費が必ずかかってくる。また、一般の人々の衣食住に関わる財務費用が必要になってくるのはいうまでもないだろう。一方で、国を治めて人々に安心して暮らしてもらうためには、道徳が必要になってくるので、結局、経済と道徳とは調和しなければならないのだ。

だからこそ、わたしは一人の実業家として、経済と道徳を一致させるべく、常に「論語とソロバンの調和が大事なのだよ」とわかりやすく説明して、一般の人々が安易に注意を怠ることがないように導いている。

昔は、東洋ばかりでなく、西洋でもだいたいにおいて金銭を賤しむという風習が極端に行われたようだ。もともと経済に関することは「得失」――利益と損失という観点が先に立つものである。だから、ある場合には譲り合いとか、私利私欲のなさといった美徳を傷つけるようにも見えてしまう。一般の人の場合、時にはこんな過ちに陥ってしまうこともあるから、強く戒めようとして、「金銭に近づいてはならない」といった教えを説く人がいた。その結果、自然と一般に定着していったのだろう。

かつてある新聞に、アリストテレス(注3)の言葉として、

「すべての商売は罪悪なのだ」

という意味の一文が引かれていたと記憶する。随分極端ないい方だと思ったが、よくよく考え直してこう思った。つまり、すべての利益と損失を伴うものに対して、人は欲望に迷ってしまいやすい。すると、まっとうな生き方からは外れてしまう場合も出てくる。だから、こうした弊害を戒めるために、このような過激な言葉を使ったのだろう、と。

B 人情の弱点として、どうしてもモノの方に目が行きやすいため、精神面を忘れてモノ偏重になる弊害が出てくる。これはやむを得ないことだろう。そして、考え方が幼稚で、道徳もあまり持っていないような者ほど、この弊害に陥りやすいものだ。昔は全体的にみれば、知識もとぼしく道義心にも薄いため、利益や損失に目がくらんで罪を犯すものが多かったと思われる。だから、ことさら金銭を軽蔑する風潮が高まったわけだ。

この点で、今日の社会の状況は、昔よりは知恵や知識もかなり進んで、思想や感情の面で洗練された人も多くなった。さらにいい換えれば、一般の人々の人格が高まってきているので、金銭に対する考え方もかなり進んできた。立派な手段で収入を得るようにし、善意にあふれた方法でそれを使う人も多くなってきたので、金銭に対しては公平な見解を抱くようにもなっている。

しかし前にも述べたように、人情の弱点として、利益が欲しいという思いがまさって、下手をすると富を先にして道義を後にするような弊害が生まれてしまう。それが行きすぎると、金銭を万能なものとして考えてしまい、大切な精神の問題を忘れ、モノの奴隷になってしまいやすいのだ。こうなると、もちろん責任はその人にあるにせよ、金銭のマイナス面を警戒して、そのプラス面まで警戒するようになり、再びアリストテレスの言葉を繰り返す羽目に陥るのだ。

そうはいっても、幸いにして世間一般の進歩とともに金銭に対する観方も随分まともになり、経済活動と道徳とを分けない傾向が高まっている。特に欧米では、

「まっとうな富は、正しい活動によって手に入れるべきものである」

という考え方が、着々と実行されてきている。わが国の若いみなさんも、深くこの点に注意して、金銭のマイナス面に足をとられず、C道義と一緒にする形で金銭の本当の価値を利用していくよう努力して欲しい、と望むのである。

（渋沢栄一著、守屋淳訳『現代語訳　論語と算盤』による。原文の表記を一部変更し、また一部を省略した。）

注1　中央慈善協会……明治四一（一九〇八）年設立。現在の「全国社会福祉協議会」の前身。

注2　『大学』……中国古代の思想書。「四書」の一つに数えられる。

注3　アリストテレス……古代ギリシアの哲学者。（前三八四～前三二二）

問1　傍線部A「論語とソロバン」について、「ソロバン」は本来は計算をするための道具であるが、本文ではこれをどのような意味で用いているか。二〇字以上、二五字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問2　傍線部B「人情の弱点」とは何か。またそれによってどのような問題を生じると筆者は述べているか。六〇字以上、七〇字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。

問3　傍線部C「道義と一緒にする形で金銭の本当の価値を利用していく」とは、どのような意味か。筆者のいう「道義」そして「金銭の本当の価値」が指し示す内容を明らかにしながら、二〇〇字以上、二二〇字以内で説明しなさい。書き出しを一字下げる必要はありません。句読点などの符号も一字と数えます。